

第3回生徒減少期における府立高校の在り方検討会議 ～より魅力ある高校教育の推進に向けて～

1 日 時

平成27年 9月25日（金）午前10時～正午

2 場 所

ルビノ京都堀川 アムールの間

3 出席者

- 委員 員 9名
- 教育委員会 橋本教育次長、山笠高校教育課長、中島高校改革担当課長ほか

4 概 要

■協議（主な意見） ◆：座長 ○：委員

- ◆前回委員の皆さん方にいただいた御意見を少し整理しておきたい。ポイントとしては、5つくらいに要約できるのではないかと考える。
 - ①教育内容に沿った適正規模・教育効果を維持するための最小規模
 - ②学校再編の必要性、地域の活性化や地域創生への配慮、通学配慮
 - ③府立高校と私立高校の役割
 - ④今後地域で必要な教育内容
 - ⑤分校の果たしている役割
- ◆本日は、引き続き、特に府北部地域の高校の在り方・活性化策について、これまでの2回の協議を振り返り、府全体も視野に入れながら、押さえておくべき視点について、具体的な意見を出していただきたい。
また、北部地域全体ではなく、それぞれの地域ごとの特色や課題を踏まえ、地域ごとの府立高校の在り方や活性化について議論をする必要があると考える。
例えば、口丹地域は比較的京都市内との結びつきが強い地域であるといえるだろうし、中丹地域の場合は私学との関係性を特に考える必要がある。丹後地域は、二つの地域以上に生徒数の減少傾向が著しい、というように、地域ごとに特徴があると思うので、地域ごとに順を追って議論していただきたいと考えている。
- ◆資料も参考に、口丹地域、中丹地域、丹後地域という順で進めていきたい。
地域の結びつきについてはどうか。教育の質を確保するためにはどのような学校規模が考えられるか。また、再編を考えるとすれば、通学面ではどのような配慮が必要か。私立との関係、さらには専門的な学びや多様な能力をもつ子どもたちの学びをどのように考えていくか。その他、それ以外にも御意見をいただければと考えている。
では、まず口丹地域について願います。
- 農業のスペシャリストを育てる農業に関する学科の整理が必要ではないかと感じている。以前、農業に関する学科で学んだ生徒たちが、農業関連にどれだけ就職したか、あるいは農業関連の大学へ進学しているのかという資料を見たが、いずれも非常に少なかった。農芸高校は広大な敷地を持っており、一人当たりの生徒にかけている予算も大きいですが、農業関係のスペシャリストを育てるとしながら、実際にはそうならないことは課題である。そういう観点で、農芸高校や須知高校の食品科学科などの関係性を考える必要がある。

○農業に限らず他の分野でも同様だが、職業との関連で、専門性といいながらその内容についてはほとんど検討されていない。農業の専門家としてあるためには、どのような技術をどのように積み重ねていかないといけないかが全体として見えていない。職業性を強調すると、誤解を恐れずに言えば、徒弟制度の上に成り立っているような、見様見真似で取り組めば良いというような教育が行われているのではないかという気がする。教育の専門性という場合、どのような技術をどのような段階でどのように積み重ねていかないといけないのかという構造について、きちんと検討すべきである。もしかしたら検討されているのかもしれないが、カリキュラムを見てそう感じたところである。このことは、おそらく農業だけではなく、他の職業教育でもそうだろうと思う。

最近よく言われる高大連携については、アドミッション・ポリシー（大学側の学生募集の観点）から求めていることが多いが、どのようにして大学の教育と高校の教育を連携させるのかということについては、両方が集まって決めなければならないと思うが、そういう動きがあまり感じられない。教育の質やレベルを見るときに、専門という言葉だけが先走って、中身の構造がなかなか見えないことを危惧している。高校だけでは絶対できないことであり、大学側や地域の関係者がジョイントして考える仕組みがないと絶対できない。

○専門性との関係もあるが、特に農業の場合、自分の人生設計を立てる場合に、農業の専門家となるためにはどういう道筋で何をしていけばよいかということがなかなか見えていない。制度としてないわけではないが、それぞれの過程がバラバラで、きちんとリンクされていないために、農業のこういう分野で専門家になりたければ、こういう可能性とこういう可能性があるという道筋が見えないのである。例えば、高校の農業に関する学科や農業大学校を卒業してから、自立していく場合はどういう形で自分の専門性を高めてやっていけるのかということが、見える状況にない。したがって、職業との関係、あるいは自分の人生設計を立てる上での可能性をきちんと構造的に見えるように、大学生や高校生、保護者に提示していく必要がある。仕組みがないのではなく、提示できていないという点を何とかしなくてはいけない。

◆徒弟制度を例に出していただいたが、そういう形よりも今の社会で必要とされる、例えば農業であればその専門性を生涯を通してどのように自分との関わりで考えることができるかということまで提示しないと、高校の再編という議論はなかなか難しいであろうという解釈でよいか。

○そうしないと農業を選択しようというモチベーションに結びつかない。農業だけではなく、伝統産業などでも同じである。

○平成24年度頃から、府立高校の特色化が一層推進されており、47校それぞれに特色があるため、統合したり、再整理したりすることは非常に難しいと思う。それほどに各高校が頑張っている様々な特色を出す努力をされてきたのだと思う。

先ほどのお話のように、専門性という言葉だけが先行するのではなく、どういう筋道で、どのようにしてその道のスペシャリストを育てていくかという構造的な共通理解が必要である。言い方は悪いかもかもしれないが、特色化を進めると、他校と同じようなことはできるだけ避けたいとなる。同じような農業に関する学科がある高校であれば、「○○高校とは違うことをしよう」となる。そういうことも影響しているかもしれない。工業関係・農業関係・商業関係など、特色化として、際立たせて他とは違うことを出していないといけない。そのため、必ずしも同じ方向でベクトルが合っているかということ、若干ずれてくるかもしれない。

- ◆違いばかりを出しているより、将来を見通した上で、それぞれが特色化を図ることが重要だということだと思う。
- 職業教育における非常に大きな問題である。高校だけで考えられる問題ではないだろうが、それをきちんと視野に入れながら、高校の在り方を考えていく。これは、北部地域だけではなく、南部地域についても言えることだと思う。
- 口丹地域だけではなく、北部地域の高校生と話をしている強く感じるのだが、その高校が自分にとって最終学校になる子と、専門学校や大学に接続するチャンネルを持っている子との間に意識の差がかなりある。したがって、もっとその子のポテンシャルを伸ばしていくためには、例えば農業を専攻している子であれば、今後のキャリア形成のパスが多様に開けている子の方が学んでいる時の意欲は強いように感じる。言葉を変えて言うのなら、仕方なしにその高校へ進学した、あるいは中学校の進路指導の結果、その高校に行かざるを得なかった子には、ある程度のキャリアパスが見えるように進路形成に繋げていくことが大切だと考える。すなわち、この会議において視野に入れておくべきは、その子の高校以降のキャリアパスに、ある程度の高等教育への接続を担保していくようなことが必要ではないかということである。それが職業教育に結びついていくよう、高校の改革だけに止めずに、大学との接続や専門学校との連携や関連性についても含めて考える必要があるという気はする。
- 口丹地域の高校の10年先、15年先の学級規模を考えると、普通科が1クラス、職業に関する専門学科が1クラスという構成になることが容易に想定できる学校がいくつかある。これで、適正な学校規模を果たして担保することができるだろうか。思い切った改編を考えるのであれば、普通科1クラスと専門学科1クラスではなく、普通科2クラスの学校にする、もしくはその逆にするという考え方をしないと、適正な規模をしっかりと担保した改革論にはならないのではないかと。どの学校に、どういう学科編成をするのかと考える場合、学科を3つも4つも設置するという発想はこの際切り離した方がよいのではないかと考える。
- 北部地域全体について感じるのだが、これまでから、様々な学科の名称をつけながら、募集定員を減らさないようにして学校を残すということで苦労してこられたのだと思う。そのことが、様々な学校の特徴性を育んできたのだと思うが、時代の変化に適応しなくなってきたのも現実ではないかと思う。大学や専門学校へと進学したい者もいれば、高校卒業後すぐに就職をする者、Uターンをして将来地元に戻りたいという者もある。これから10年先、20年先を見たときに、この北部地域において必要とされる教育は何かということを考えなくてはならない。
- 丹後地域では、「観光産業がこれからの地域の一大産業である」と言われるが、それを担っていくホスピタリティー・マネジメントを教えている学校はない。例えば、商業科において、これから先、ビジネスではなく、マネジメントしていく人材を育てていくためには、どういう教育が必要なのか。そういう視点での専門性を持った学科が必要ではないか。
- また、農業教育については、これまでは通学距離を考慮して、ここにもここにもと設置されていたが、今の時代、ある程度広域で通学することができる。通学費に対する支援は必要だが、農業大学校と繋がりをもって専門性を追求していく学校として集約することができるのではないかと。その地域において大学などの専門的な進路に進むための普通科をどうまとめていくのかという点も議論しながら、統廃合ではなく、新たなる10年、20年後のための学問の在り方や教育の在り方をしっかり見つける必要がある。
- 我々としては、子どもたちに地域を支えてもらいたいし、地域のリーダーになって

もらいたいと思っているが、そうした子どもを育てていくための教育の在り方はどういうものか。グローバルに世界で頑張ってくれる人材も必要だが、全員がそうでは困る。全生徒の6割から8割は地元で頑張りたいし、1割ぐらいは中央で頑張ってもらいたい、現在は、「全員、中央で頑張ってい」、「全員、グローバルに世界を廻って頑張ってい」という教育になっているのではないか。

- 大学コンソーシアム京都と京都市が連携して、学生の職業の選択意識について調査を行い、先日、報告書を出したのだが、無論、社会的な現象なので、最終的にPASS解析で見ても、説明の度合い数は全体の20%程度である。私は非常に大きいと思うが、経済を専門とする者は「えっ20%？こんなことでいいの？」と言う。それぐらいしか説明できないのだが、それができたことは大きいと思っている。そこではっきり出てきたのは、京都で学んだ学生が、京都に留まりたいという意識に直接的に影響を与えているのは、学生の持っている地域性である。地域性というのは、大学でのゼミなどのカリキュラムにおいて、地域と連携したPBLを行っている、あるいは大学コンソーシアム京都のインターンシップに参加しているというように、一つの大学の中ではなく、大学を越えて、しかも地域と連動している人間の地域性が当然強いということになる。また、そういう人間は同時にベンチャー企業に対する指向性が強い。そうではなく、東京や海外に行くということを選択肢にしている人は、大企業、あるいは企業のイメージで選択する。

また、全く京都を選択肢にしていないが、自分の出身地域を選択肢にしている人は、全くそれとは逆に同じ線になって出てくる。東京とか海外で勤務するというを頭に描いている人は、自分の出身地に戻ることをまったく考えない。逆にそれを考えている人間は、東京などに行くことは考えていない。これはきれいに出てきた。したがって、裏返して言えば、高校もそうだと思うが、大学での教育の在り方は、地域と連携しながら、その中で教育をきちんと放り込んでいくということが、学生が自分の人生をどう構築していくかというものの考え方にすごくインパクトを与えているということと言える。その影響は高校であればもっと大きい。したがって、教育の質をどう展開できるかということで、教員の配置や規模を考えないと、大きなミスをおかすことになるのではないか。

- 府立高校のどこの校長も少しでも自分の学校に魅力があり中学生が志願をしてくれるように、特色づくりに一生懸命励んでいる。しかしながら、第1回の資料にもあったように、子どもの数が大幅に減る中で、それも限界にある。地域、あるいはその地域の経済基盤、産業をきちんと絡めながら学校づくりをしていくことが求められている。例えば、口丹地域のそれぞれの高校で学科が設置された背景がある。京都府は、口丹地域に限らず、いわゆる総合選抜制の中で学校づくりが進められてきた経過がある。しかし、今考えるべきは、各通学圏において各校がどのような役割を果たすかということである。全国的に見ても同様のことが言えるが、例えば、大学進学を目指す高校、地域の多様なニーズに応えて進路も多様な高校、あるいは、スペシャリストを目指す高い専門性を育む学校というように、役割分担をして、それぞれの通学圏の中で高校に求められるニーズに応えたり、あるいは、それに合った特色づくりを進めたりしているのが一般的である。

総合選抜制の中で、市町村より小さい地域のニーズに応えるためにできた学科が現在も延々と続いている。子どもの数が少なくなり、とても学校規模を維持できなくなっている学校もあれば、南丹高校の総合学科は府内に2校しかないのもっと広い地域から生徒を募集してしかるべきだと思う。農業に関する学科でいえば、荒木委員の御指摘のとおり、統合してもっと魅力ある学校、子どもたちがプライドを持って学べるような専門性のある学校に再編することも1つの方法である。他方、北桑田高校の森林リサーチ科には他府県からも志願がある年度もある。北山杉という一つの文化を担っていく専門学科でもあるので、維持していくことが求められる。

要するに、通学圏の中でどういう役割を果たしていくかということであり、総合選抜時代の狭い地域の中でニーズ応えることという発想をしていては、学校の適正規模を維持できないことは明白である。このことを十分考えた上で、しかるべき策や決断をしていってもらいたい。

○口丹地域に限定した意見ではないかもしれないが、高校の学科や職業教育を考える上では、地域とのつながりが非常に大切だと思う。それぞれの通学圏の地域との関連や地域の良さを明確に打ち出すことは、とても大切なことである。また、それぞれの通学圏には、特化した学校がある。例えば、口丹地域には農芸高校、中丹地域には工業高校、丹後地域には海洋高校。独自の教育内容を持つ学校などは、他通学圏からだけでなく、他地域からも生徒が志願してくる。それぞれの地域ならではの学びの場が他の地域に広がり、その地域の中学校卒業生だけではなく、他地域からも希望者を募るといような方策が必要だと思っている。

したがって、現在設置されている学校をさらに統合したり、また、発展させたり、その地域で必要とされる学科を新設したりする必要がある。職場体験やキャリア教育を通じて、高校で学んだことをすぐに実社会で役立てようという考えを持つ中学生も増えてきた。そうした生徒たちには、資格取得ができる高校で学ぶことも必要であるし、大学等で学びたい子どもにとっては、高いレベルの学力を形成できる学科を各通学圏に設置することなどで、地域の活性化にも繋がっていくのではないかと思う。

◆通学圏における各学校の性格をきちんと考える必要があるという御意見をいただいたと思うが、これは口丹地域だけではなく、他地域にも関わることである。特に口丹地域の場合は、農業に関する学科が多いことを切り口にして御議論いただいた。共通する部分はあると思うが、次に中丹地域について議論をお願いしたい。個人的な理解かもしれないが、特に私立との関係をきちんと考えなければならない地域ではないかと思うので、その観点も含めて御議論いただければと思う。

○子どもが中学校から高校に進学するにあたり、保護者の思いとしては、子どもが普通科に行きたいと言えば、大学進学を考えていると思うのだが、職業に関する専門学科に行きたいと言えば、進学を考えずに、高校を出たら進学せずに就職するのだと思う。一時の学歴社会の考え方はかなり変わってきていると思うが、収入など様々な面を考えると、学歴社会であることには違いがない。進学まで考えている子は専門学科には行かないと思うが、各高校の専門学科において、「うちの学校に来てもらえば、就職でも進学でも希望する進路に対応します。」というような教育方針を掲げてはどうか。

先ほど、河村委員が専門性の話をされていたが、例えば、府立大学の農学部を卒業した子を何人も知っているが、農業関係に就職している子はおらず、府立大学を卒業した学歴を持って、「公務員になりたい」「消防士になりたい」と言っている。保護者が高校のプログラムを見たときに、これなら将来性が十分考えられるという安心感を持って、工業を学びたいのであれば〇〇高校、農業を学びたいのであれば△△高校、漁業を学びたいのであれば海洋高校というように、将来の職業も考えた上で、高校から専門学科に行きたいと思わせるようにすればよいのではないか。

◆高校卒業後の進路について、必ずしも狭い範囲で固まったものとしなないようにしておいた方が高校を選んでもらいやすいということかと思う。私は、長く教員養成系の学部に関わっているが、大学を出て全員が先生になるわけではないし、多様な進路があるので、学びの場としてどう機能させるかということかと思う。そういう意味で、口丹地域や中丹地域では専門学科の卒業後の進路は少し狭い形で捉えられているのではないかということだろうか。

- 中丹地域、特に福知山に限った話であるが、私学と公立高校の関係性をどう整理するのは難しい問題である。しかし、公立高校において、ある高校が非常に力をつけ、地域から期待を込めて見られるようになるということは、逆に言えば、その高校に入学できなかった子は、その高校の生徒ではないことに劣等感を持つなど、高校間の格差が時として垣間見えることがある。
ある高校は進学率も高く、国公立大学に進学する生徒も多い。多様な学科も設置され、市民からも高い期待を持たれている。しかし、その反対の側に立つと、学校間格差のようなものが少し見えるような気もする。であるならば、公立高校は一つにまとめていくことはできないだろうか。そうすれば、私学との関係も若干変わるかもしれない。
- 中丹地域には、福知山高校三和分校がある。同校は定時制だが、本来的には定時制の高校は、働きながら学ぶこともできるという役割を担っていたと思う。現在では、すっかり役割が変化し、多様な生徒の学習の場が変わってきている。三和という地にあるが、三和の子どもが進学しているということでもない。農業科と家政科があるが、以前とは異なる形になってきている。こうした現在の分校の在り方については整理をして考えて行くという手はあるのではないか。
- 次に、工業高校についてだが、工業高校は様々な実績をあげ、資格取得にも熱心で、工業系の大学への進学実績もあり、さらには、地元の長田野工業団地や綾部工業団地などにある企業に就職するなど、地元のニーズにも応える役割を果たしてきたし、地域の期待も大きい。京都府でも唯一の工業に関する学科の単独校である。したがって、工業技術や知識をしっかりと身につけられる、日本の中でも先導するくらいの高校になってほしい。様々な設備や機材が整ったすばらしい学校だと思うが、さらに一層発展してほしいという期待を持っている。
- ◆学校間の格差のことを意識するならば、例えば普通科を一つにするといったことも検討してはどうかということか。
- 普通科を特定の学校に集約してもよいと思う。そうすれば、私学との競合についても緩和されるのではないかという気がする。
- ◆専門性の高い学校の充実、さらなる飛躍ということも高校の在り方を考える場合には押さえておくべき要件である。
- 現実問題として、昭和63年に43,000人であった15歳人口が、現在は24,000人となり、23,000、22,000、20,000人と減少する時代が目前に来ている。高校進学率は今や95、96%となり、限界に来ている状況である。様々な考え方があると思うが、中学校の成績が5段階で、「分かっていない」が「3」、「ほとんど分かっていない」が「2」、「まったく分かっていない」が「1」として、「1」であっても高校に進学しているという現実がある。しかし、多くは、何とか高校では取り返したいという思いで高校に進学してきている。その子たちをどう受け入れていくかということ、また、東大・京大などの難関大学を目指す子にどう対応するか。「早く学校に行って、今日はこれを勉強したい。」という学習意欲は全ての子が持っている。こういうことを学びたい。こういう友人と話がしたい。部活動で大会に出たいという様々な思いをもって子どもたちは学校に来る。それを受け入れる学校は、常に子どもたちのことを考えた学校づくりをしていかなければいけない。特に、私学においてはそうでなければ選んでもらえないという現実がある。
先程も述べたが、中学校3年生が43,000人だった昭和63年から私学は40校とほとんど

ど減っていないし、公立高校も同様に、宇治と八幡の再編以外は統廃合されていないことから、無理が生じてくることは目に見えており、なんとかしていかなくてはならない。その際、生徒急増期に私学がかなり無理をして生徒を受け入れたということは忘れないでいただきたいと、常々、議員の先生方や知事にも申し上げている。そういう状況の中で難しい選択をしていかなくてはならないわけだが、子どもたちが一番生き生きと喜んで通えるような学校づくりをしていくという視点を決して見失ってはならないと思っている。様々な子どもたちが高校に進学してくる。「この大学を目指すんだ」という強い意識を持って、あるいは、早くから子どもを予備校や塾に通わせている保護者もおられるが、「私の行けるところはどこだろうか」という思いで、進路指導の先生や塾の指導に従う方も多く、高校を卒業したらどうするのかということを考えている子がどれだけいるだろうかと思っている。多くの友人と影響し合いながら学校生活を送ることは大切である。北部地域の生徒数の少ない学校では影響し合うことや刺激を与え合うということが少なく、ともにいろいろな物事をつくり上げていくという経験もできにくい。クラブで大会に出てもなかなか勝てない。自分たちはだめなんだというように感じてしまう。そういうことも考えると、統廃合を進めていかなければいけないのではないか。それをどうするかということになると様々な意見があり、この場ではなかなか難しいと思う。私学も京都府の中でどういう役割が果たせるかということ、今後考えていかなければならないと思っているが、私学の統廃合はかなり難しい。生徒が100人でも50人でも、給料が半分になっても自分たちの教育を守るのだという気持ちさえあれば、私学は続けていけるわけだが、公立の場合はそういうわけにはなかなかいかない。子どもたちの教育を考えた統廃合をするべきだと思う。

公設民営という言葉が適切かどうかは分からないが、そういう手法も考えられる。私学も多くの補助金をいただき、あるいは、あんしん修学支援制度を充実していただいているその経緯から、私学の存在は京都府の中で重要な位置を占めつつあると思うので、京都私学40校が結束して京都の教育をより良くするよう努めていきたいと考えている。

- ◆高校の魅力づくりをきちんとすることが一番のベースだということ。また、一方的な解釈かもしれないが、私学の在り方も柔軟に考えていく余地はあるということであったかと思う。中丹地域は比較的私学の占める割合が大きい地域であるので、柔軟性をもって全体の在り方を考えるべきだと思う。
- 生徒急減期の中では今後の生徒数を踏まえて学校の配置をどのように考えるかという事は喫緊の課題だと思うが、これを公立VS私学という構図で捉えては視点を誤る恐れがある。公立高校の校長は、私学がなくなればいいなどと思ったこともないし、私学があつて公立があるという前提で学校づくりを考えている。行政の立場でも、山本委員が言われたように子どもたちにとって何が大事かというニーズを踏まえた公立高校の定員設定を行っているので、私学が光り輝いている間はなくなるということは考えられないと思っている。生徒数が絶対的に減っても、公立だけが残って私学がなくなるとか、私学の存在をまず前提として公立を減らすという考え方は一切ないという中で、ニーズを踏まえた定員配置、そして特色づくりの施策が進められるべきである。私学のために公立が、あるいは、公立のために私学がという論点にならないようお願いをしたい。公立と私学が共存共栄していくことを前提として、府民のニーズを踏まえた学校づくりを考えてもらいたい。
- 公立がなくなればいいということではなく、公立が輝くことで私学も輝くように、共存共栄していくことが大前提だと思っている。
- 中丹地域の職業に関する専門学科について、学科構成とネーミングが果たして今

のままでよいかということについては議論する必要がある。地域創生の視点で見て、しっかりと応えられているか。あるいは高校生のニーズに沿っているかという議論が必要な時期になってきていると思う。というのは、今ある専門学科の構成や名前をつけた時期は20年以上も前に遡る。それが、今の時代のニーズに沿っているか、企業ニーズや地域ニーズに沿っているかと考えると、少し時代遅れの感があるかもしれない。さらに、高校生のニーズに沿っているかどうかということは大切なことで、名前一つでかなり中学生の高校選択のコードは動く。一つの例だが、かつてどこかの新聞に、「ヤバイ」という言葉は、中学生・高校生にとってはポジティブなワードであると書いてあった。我々の年代では、「ヤバイ」ということは「まずい」というネガティブな意味で使う。このくらい感性が違うので、言語感性に沿って言うならば、高校の再編や学科再編を考える場合には、地域のニーズやホスピタリティー・ツーリズムのような時代に沿った学科を構成していく必要があるということと、地域創生を含め、高校生のニーズに沿った議論も必要になってくると思うので、そういった柔軟な考え方に立った学科再編の議論をこの際するべきではないかと思う。これは中丹地域に限ったことではなく、職業に関する専門学科全体について、一度考え直す必要があるのではないかと思う。

◆ネーミング一つにしても単なる小手先の問題ではないということだと思う。きちんと対応することで本当の意味で、そこで学ぶということがまわりに理解されるということを考えておく必要があると思う。工業高校を含め、多様な進路を今ある高校は持っている。中丹地域の再編でも根本的なところから考えていただく必要があるということになるかと思う。また、中丹地域においても分校の性格がかなり設置当初とは異なって来ているという御意見もあったがいかがか。

○よく見えていないところもあるが、おそらく分校は、先ほどから出ているプロフェッショナルリティ、専門性と連動していると考えられる。例えば、農業に関する学科を設置する分校が結構多い。今日の話全体にも関係することだが、専門性をどう構築するかということと関係していると思う。全国から生徒を募集するぐらいの専門性を明確にするということになれば、通学区域や通学距離の考え方も異なってくる。したがって、高校教育をどう配置するのかとすごく連動している。

例えば、農業大学校などのように、農業のことはそこに行って学べばよいということであれば、通学区域は府全体として考えれば良い。しかし、専門性そのものを強化するのではなく、一般性を前提として高校教育を考えた場合には、通学区域はある程度、物理的に通学できる範囲内でどうするかということになる。専門性のある高校教育と一般的な高校教育をどう配置するのかと連動している。政策的にどういう分野で専門性のある高校教育をどれだけつくるのか。あるいは、一般的な高校教育をどれだけ置くのかに関わる。

また、カリキュラムの内容にも連動するが、高校レベルで重要なことは専門性の特化だけではなく、いわゆるリベラルアーツ的というか、一般教養的なものがきちんと含まれているかということであると思う。したがって、専門性の生かし方とベースになるヒューマニティの確保がどうあるべきかということもカリキュラムの中できちんと認識してインプットしておかないとおかしなことになると危惧している。さらに、専門性を強化して、極端なことを言えば全国からその専門性を身に付けるためにこの高校へ来てくださいますとする場合、農業大学校を見てこれはいいと思ったのが、全寮制である。校舎の中だけで行うのが教育ではない。24時間、生徒がどういう生活をどういう人と関係して過ごしているかということが、教育の一番大きなポイントだと思うので、専門性を強化する形で学校を統廃合するというか、リインテグレーションするということであればなおさらのこと、全寮制を含め、生活の面での教育はこうあるべきということも考えなければならぬ。こういう教育の在り方を考える場合、自宅で生活していてそこから通学するということを前提に考え

と思うが、場合によってはその考え方を変えた方が良い場合もある。農芸高校には寮があるが、全寮制は1年生だけなので、もったいないと思ったし、女子寮もないが絶対つくるべきだと個人的には思っている。寮での生活は圧倒的に重要である。寮生活の在り方も教育の再編の在り方にきちんとインプットすることを考えないといけないと思っている。今まであまり討議されていないが、生活の面から高校教育を考えることも大切である。

専門性と一般性とのカリキュラムをどうするかということとも関係するし、専門性が特化している場合の地域との関係性はまったく異なってくる。その高校がある地域だけでなく、府内全体の専門的な企業などで働く人とのネットワークにおいてPBLを行うことも可能だと思うので、地域との関係性の在り方も違ってくる。

- 描いた絵をどのように実現していくかというフレーム枠が討議されていないということが気になっている。例えば、専門性を持つ高校であろうとなかろうと、物理的にそこに存在している地域との関係性で重要になるのは、高校教育を強化しようとする場合、高校だけで考えるのではなく、専門学校や大学、あるいは地域の行政など、横断的に、ステークホルダーとして直接的・間接的に関係ある者が常に意見交換をしながら、こういうふうに進めていこうというようにして進めていくことがすごく重要である。

日本の場合は、与えられた部局だけで全部やろうとしてしまうが、そうすることの弊害がこれからますます大きくなると思う。手法をどうするかということもきちんとしておく必要がある。

- ◆この協議で具体的な方策まで具体的に言うことは意識して私は避けておいた方がいいかと思って、あまりそちらに振り向けることはなかったのだが、配慮すべき重要な事項だという御指摘はいただいたとおりでと思う。
時間も押してきたので、次に、丹後に視点を移して御意見をいただければと思う。

- 丹後地域だけではなく、基本的には、子どもたちには自分の住んでいる地域に定住をして欲しい。一旦、地域を離れてもできるだけ戻ってきて欲しいと思っている。京都府が目指すべき方向性も、基本的には同じであると考えている。府においては、丹後地域では「海の京都」という切り口が示されており、海を守るという役割を海洋高校をはじめ、専門機関が担っていく。「森の京都」においては森林を守っていく専門的な機関が必要である。また、舞鶴・綾部・福知山の工業団地をさらに広げていくとすれば、その専門的な分野が求められる。

そうした中で、丹後地域においては観光産業しかないという議論に基本的にはなっている。そうするとそれに見合う学科が高校にも必要になってくる。また、日本の中で粛々と進んでいる高齢化に対応した職域も増えてきているが、それに対する専門的な学びができるところが丹後地域にはない。そういう意味において、学校を再編成して、介護や観光産業におけるマネジメントを教える学科などを設置することを考えていくことが大切であると思っている。

また、農業については、ある程度の規模を持って集約し、その高校と大学が結んで、一貫して学び、現場で早く働きたい人、研究に入りたい人がもう少し、農業という何か生命体に対する考え方を学べるものであっても良いだろうし、海外から、高校ぐらいから受け入れていくような農業のシステムがあっても良いのではないかな。そういう中で、なくすのではなく、集約する。丹後地域に必要な高校の在り方というものをもう一度考えていかなければならないと思っているし、進学においても府立大学や関連性のある大学等にも繋がっていく高校であって欲しいと思っているので、そういう部分がより一層明確になっていけばいいのではないかな。

- 丹後地域に特化した話ではないかもしれないが、とりわけ丹後地域の特性を考えた

場合、いわゆる分校には二通りの機能が既にあり、専門性を前提とした分校がある一方で、支援を要する子どもたちが多く学んでいる分校もある。これを同じ分校というくくりで議論することは非常にリスクだと思う。例えば、丹後地域を前提にして考えると、地域を活性化し、高校生の学ぶモチベーションを高め、あるいは維持するための方略の一つは、キャンパス化だと思っている。〇〇高校△△分校ではなくて、いわゆるキャンパス化することによって、一人の先生が複数のキャンパスで教えることができるなど、教員の流動性が高まる。高校生からすると、部活動や行事が一緒にできる。こうした流動化を伴うキャンパス構想が必要ではないかと考える。そうすることで、ある程度の教育効果や規模がきちんと確保できる。また、これを端緒にして、例えば、こうした人的な交流のほか、ICTを活用した授業や交流も必要になってくるだろう。

一方で、特別な支援を要する子たちへの対応としては、例えば京都八幡高校が一つのモデルになると思う。つまり京都八幡高校のように、併置する形で支援学校を設置する。定員を確保しながら、分校の機能として果たしてきた役割を集約していく。そうするとワンキャンパスで多くの機能を担うことができ、さらに教育的な配慮をすることが可能になる。ただし、入学者選抜をどうするのかという問題などは生じてくる。例えば、宮津高校と伊根分校を一本化した場合に、宮津高校の入学者選抜をどうするのかということになるが、この点については、選抜において合理的な配慮を行うことで、解決できるかとも思う。

キャンパス化も含め、分校の2つの機能を分けて議論していく必要があると思う。その上で、スクールバスを運行するなどのトランスポーテーションを考えれば、対応していけるのではないかと考える。

- 高校生の学習・研究面や体育・文化面での地域への発信力は、本当に高いものがある。高校生の様々な活動や取組が、地域や小・中学校に広がっていくためには、一定の規模・生徒数をもって、様々な取組が可能となるようにすることが必要である。急激に減少する丹後地域の生徒数を踏まえると、学校が点在化するより、核となる学校として活動が活性化することが大切だと思う。そういう意味では、先ほどのキャンパス化というようなことも、一つ視野に入れなければいけないかと思う。
- 分校の役割を継続できるような、新しい形を取り入れていくことも必要だと思う。不登校の子どもや特別な支援を要する子どもの受け入れについて、現在、大きな役割を果たしている機能を、キャンパス化するとか、単位制の学科を設置するといった形で移行するなど、その子たちの将来の社会参加に役立つような編成替えが必要だと思う。
- 観光、また高齢化に対応した介護分野など、丹後地域だからこそ必要な学科や他の地域からも生徒が集まってくるような専門性を持った学科が必要である。併せて、丹後地域にはものづくりなどの産業が根付いているので、そうした産業に結びついた学科を考えることも必要かと思う。またその際には、私立高校との共存ということも大切なので、教育課程の内容が公私で重複しないようにすることも大切である。
- 地域が少子高齢化によって逼塞していくということは、何とも言えないものがある。先ほどキャンパス化という言葉で表現されたが、京丹後市については総合的な大規模校を中核校として持てばよいと思う。そしてその高校に普通科や生徒のニーズや感性に合った学科、職業に関する専門学科を設置する。一定のボリュームのある生徒が確保ができる学校を京丹後市の中心部に設置してはどうか。そうすることで、生徒たちが夢や誇りを持ち、おらが学校というか、自慢のできる高校があると言えるだろうし、高校づくりが地域を活性化させる力にもなり得るのではないかと思う。

交通事情も以前よりは良くなってきているので、スクールバスを整備するとか、あるいは、冬場は通学できないということであれば、寮を設置することも考えてはどうか。これまで特色化を目指して、各高校が取り組んでこられたことを踏まえつつ、減少期における新しい高校づくりに力を入れる必要があるだろう。

以前に、地域とのつながりの大切さということをお話したが、コミュニティースクールにおけるいわゆる学校運営協議会の設置ということも考えられる。府内では京都市以外にはコミュニティースクールの数は少ないが、文部科学省は力を入れている。全国的にみて、高校で学校運営協議会やコミュニティースクールという形式を取っているところは10校程度である。「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づく学校運営協議会であれば、一定の権限と責任をもって、学校運営に参画する法的根拠もあるので、地域の意見を学校運営に反映できる良さがある。拠点校を設置するとなると、なかなか声の届きにくい地域もあると思うが、法的な根拠に基づいていなくても、運営協議会のような組織を立ち上げれば、そうした課題をフォローしていくこともできるのではないか。丹後地域の生徒たちが夢や誇りを持てる、一定活力のある高校をつくってはどうか。

◆地域の中学生に是非ともそこへ行きたいと魅力を感じてもらえる高校を丹後地域につくるべきであるという御意見であった。現に、様々な活動で中心となっている学校はあるが、よりしっかりした形のものをつくることの意味合いを強調していただいたのだと思う。

○丹後地域は、子どもの数の減り方からいっても、統廃合が最も想定される地域だと思う。以前に、必要にして十分なる教育の質を維持するための最小規模について述べた。小・中学校も同じだが、学力をつけることと社会性を身に付けることが学校の大きな役割として求められている。そのために、様々な統廃合の在り方が模索されるべきではないかと思っている。幸い、北部の分校は、学科か課程が本校と異なる。これまで貴重な役割を担ってきた分校は、入試システムが本校とは異なるので、設置場所が変わってもその役割は維持できるのではないか。

ただし、北桑田高校の森林リサーチ科と同様、丹後地域においても、この地域に必要な学科はある。例えば、全国の水産高校が停滞・衰退する中で、本府の海洋高校の生徒たちは胸を張って、目を輝かせながら集中して学んでいる。それぞれの学校がこれまで培ってきたものを大切に考えながら、キャンパス化か、分校化か、拠点校方式かということをそれぞれに判断していく必要があるのではないかと思う。

いずれの方法をとるにしても、交流や連携においては、一方向的というか、あまり中身が伴わない形が多いのだが、是非とも、インタラクティブな、あるいは補完的な役割分担を子どもたちにもしっかりと意識させ、社会性を身につけることにも資する学校づくりが求められるのではないかと思う。要するに、活発な総合的な連携や交流と補完的な関係を築くことで、子どもたちが胸を張って学ぶことができる学校づくりが行われるよう期待したい。

◆学校間で補完関係や協力関係をしっかりと整えれば、学校でできることや学びの幅を広げることも可能だという御意見として聞かせてもらった。確かに、キャンパス化しなくても、連携関係をきちんと整備することで対応できるという御意見をいただいていると思う。

○高校を活性化する一つの方策として、部活動があげられる。生徒指導的な観点も踏まえ、北部地域に魅力的な部を置くとした場合、どの学校でも同じ部活動を展開する方法と、ある学校に特定の指導者をしっかりと配置し、重点化にするという方法がある。個人的には後者の意見に賛成だが、高校を訪問した際に、生徒指導部の先生とお話する際、一番最初に部活動の加入率をお聞きする。すると、学校がしっか

りとしている、生徒が落ち着いてきた、良い学校になってきたという印象をもつ学校は、部活動における教育効果が非常に高いとも言える。こういう観点も高校の在り方を考える場合には押さえておく必要がある。

先ほど河村委員からも寮生活の話があったが、例えば、海洋高校に行ったら寮を見せてもらう。寮がしっかりと落ち着いていると、高校全体が落ち着いてくる。部活動や生徒指導といった観点を落とさないようにしなければならないと考える。

- ◆北部地域の高校では、部活動において、全国大会など高いレベルで実績を残しているということも会議資料から見てとれる。仮に高校を統廃合するとしても、そうしたクラブは良い形で残して欲しいし、高校の在り方を考える場合には、生活面でこ入れや指導についてもきちんとして押さえておく必要がある。単に、狭い意味での学びだけではないという御意見をいただいた。全校に寮を設置するとなると予算的にも大変だと思うが、寮の重要性については繰り返し御意見をいただいたとおりでと思う。

- 高校の部活動が活性化することは、地域のスポーツクラブ的な機能として、小・中学生がそこで活躍をしたり、基礎を学んだり、また地域の方々が、関心を持たれたり励みに思ったりすることにもつながる。また、小・中学校にとっても、高校の体育面・文化面での活動が、良い手本になり、交流的な取組ができれば、競技力や文化的な力量も向上する。そうしたことも考えると、互いに切磋琢磨するためにも一定の規模や人数が必要になってくる。

また、丹後地域の交通事情についても十分踏まえておく必要がある。例えば、一つの核的な学校をつくれれば、通学の範囲が広がる。その手立てはどうするのか。キャンパス化したとすれば、同じ学校として部活動等で一緒に活動する機会も増える。その場合の移動手段をどうするかということについても考える必要がある。

- ◆本日は、3つの地域に分けて、それぞれの地域の持つ特性を踏まえながら御議論いただいた。全体としては、

- ・高校の在り方を考える場合には、高校卒業後のことも考えて議論しなければいけないのではないかとということで、就職や進学に関連した意見もいただいた。
- ・また、公立高校間で極端な学校間格差が出ないようにするためには拠点校＋キャンパスという形で教育の質を保障することも考えられるのではないかと。
- ・普通科の在り方を考える場合と職業に関する専門学科の在り方を考える場合の論理は基本的に違うのではないかと。職業に関する学科は広い地域から志願できる魅力ある教育を提供することも必要だという御意見もあった。全国規模で他府県からたくさん入学希望があると、府立学校としては問題があるようにも思うが、心の広い京都府のことだから、そういうことも考えていただけるとは思わないか。魅力ある学校づくりをするためには、もっと門戸を広げた方が良くはないかということである。また、寮の問題について御意見をいただいた。
- ・さらに、専門性を持つ職業に関する学科として、集約化してレベルを高めることが必要だということ。
- ・学びの活力を引き出すためには、私学と公立高校がともに歩み、良い意味での競い合う関係を持っておいの方が良くはないかという御意見もいただいた。
- ・分校に関しては、役割が変化し、もともとの設置趣旨とは異なってきているということも理解しておく必要があるのではないかと。支援を必要とする生徒の学びの場であるということもあれば、地域の学びの場であるということもある。
- ・各校間の連携についても考えてはどうか。時には私学との連携も考えて良いと思う。また、クラブ活動の重要性についても御意見をいただいた。

その他、付け加えていただくことがあれば、お願いしたい。

○前提として、各学校に魅力がないと保護者としてはその高校には行かせたくない。最近、各大学ごとの司法試験合格率のランキングが新聞に掲載されていたが、この大学の法学部に行ってもほとんど司法試験に受からないとなると、何のために法律を勉強するのかわからなくなる。また、保護者としても、子どもがその大学に行きたいと言っても、行っても意味がないのではないかと考える。これは、高校においても同じことが言えると思う。地元で活躍する人材を輩出する専門学科については、さらに教育内容を特化し、単純にたくしてほしくない。私は京都市内の北部に住んでいるが、優秀な子の中には私学に行く子もいるし、部活動の強い学校を目指す子もいる。先生方が今勤めている学校において、思いを持っておられるかどうかということも大切になってくる。先生方もしっかりしていただいて、「3・4年いたらよその高校へ行くから」ということではなく、全体に取り組んでいただかないと雲をつかむような話になって終わってしまうのではないか。小・中学生の夢を聞いて、「それならこの高校に行ったらいいよ。」とアドバイスできるような府立高校や私立高校になるよう努力し、府全体として良い高校教育の場を提供してもらいたい。

◆配置にふさわしい教員の在り方もあるだろうという意味も含め、保護者側の視点も大切にしないと、高校を再編・統合するにあたってはうまくいかないのではないかという御意見ではないかと思う。

○府教育委員会においては、「府立高校改革推進計画」を平成15年に策定され、その後、生徒の急減期に対応するために、府立高校の規模の適正化・適正配置に係る「府立高校改革推進計画（Ⅱ）」を平成16年度に策定された。府教育委員会では、これまで、この推進計画に基づいて着々と改革を進めてこられた。学校の適正化・適正配置の課題についても、推進計画にフレーム枠があるのだから、自信を持って高校の再編成や発展的な統合、転換をこの機会に進めていただければと期待している。

◆各委員から非常に熱心な意見をいただいた。府教育委員会においては、検討会議で出された意見を参考にさせていただきながら、それぞれの地域の方々やこれから高校に通うことになる生徒諸君や保護者の意見も十分聞いていただいて、より具体的に検討を進めていただければ、我々としても意見を出した意味があったと納得できると思うので、よろしくお願ひしたい。

ピンチはチャンスだとよく言われる。それはそのとおりだと思うが、課題が大きければその課題を解決する力も大きくなる。さらにその課題を新しい問題に展開しようとする2倍の力が必要となる。ピンチをチャンスに変えようとする場合、ピンチをゼロにする力と、さらにチャンスに変える力を加えていく必要がある。それぞれの立場の方々の納得、力を得られて、関係の方々の思いを踏まえていただき、良い形での再編等を検討していただければと思う。

北部のことを中心に議論をさせていただいたが、それだけではなく、京都府の高校の在り方に大きく関わることとして、参考にいただければ大変ありがたい。

委員の方々に熱心な御議論をいただいたことに感謝申し上げ、教育委員会にお返ししたいと思う。ありがとうございました。

■教育次長あいさつ

小寺座長には、3回の会議で進行役・まとめ役を務めていただき、感謝申し上げます。また、各委員の皆様方には、それぞれ御多忙の中、本検討会議に御出席いただき、毎回、熱心に御協議いただいたことについて、厚く御礼申し上げます。

この間、わずか1ヶ月足らずの短期間に3回の会議を集中して開催させていただい

たが、生徒減少期における府立高校の在り方や今後の府立高校の教育の充実等について、さまざまなお立場や視点から貴重な御意見を幅広く頂戴することができたと思っている。

特に、生徒減少の著しい口丹以北の府立高校について重点的に御協議いただいたが、その中で、地域社会において府立高校が持つ役割の重要性を改めて認識をするとともに、今後、北部地域の府立高校の在り方・活性化に向けて検討の方向性や留意点など、これからの議論のよりどころを明確に与えていただいたと感謝している。

今後、府教育委員会としては、この会議でいただいた皆様の御発言の趣旨を十分に踏まえさせていただき、最後に座長からお話しいただいたこと、また、委員からも多様なステークホルダーと意見交換をしてというお話をいただいたが、地元の皆様の御意見も伺いながら、府立高校の適正規模・配置や教育内容などを十分に検討し、まさにピンチをチャンスに変えていくという視点で、生徒たちにとってより魅力ある府立高校を目指して、積極的に府立高校改革に取り組んで参る所存である。

委員の皆様方におかれては、今後とも引き続き、本府の教育行政、高校教育の充実に深い御理解と御協力を賜ることをよろしくお願い申し上げます。

本日までの皆様方の活発な御協議に改めて感謝申し上げ、閉会にあたってのお礼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。